

思考力・判断力・表現力の育成に向けたパフォーマンス課題と評価
—小中の学びの接続をめざして—

黒川 愛子・山川 拓・泉 恵美子

Performance Tasks and Their Evaluation to Foster the Students' Ability
to Think, Judge, and to Express Themselves
-Aiming at the Continuity of English Education from Elementary to Junior High School-

Aiko KUROKAWA, Taku YAMAKAWA, Emiko IZUMI

教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要

第5号 (2023年1月)

Journal of Educational Research
Center for Educational Career Enhancement

No.5 (January 2023)

思考力・判断力・表現力の育成に向けたパフォーマンス課題と評価

—小中の学びの接続をめざして—

黒川 愛子・山川 拓・泉 恵美子

(帝塚山大学) (京都市立九条塔南小学校) (関西学院大学)

Performance Tasks and Their Evaluation to Foster the Students' Ability

to Think, Judge, and to Express Themselves

—Aiming at the Continuity of English Education from Elementary to Junior High School—

Aiko KUROKAWA・Taku YAMAKAWA・Emiko IZUMI

2022年8月31日受理

抄録：本研究は、文部科学省（2017a）による小学校「外国語活動」「外国語科」の全面実施の先駆けとして、文部科学省（2014；2015）及び文部科学省中央教育審議会（2016）を基に行われ、「英語教育の抜本的拡充及び高度化（文部科学省、2014）」と、「互いの考えや気持ちなどを外国語で伝え合う対話的な言語活動（文部科学省、2015）」の探究として、パフォーマンス課題と評価の取組を報告するものである。本研究の目的は、「思考力・判断力・表現力等」を育成する言語活動の探究として行ったパフォーマンス課題と評価の取組が、生徒のパフォーマンス課題の成績と英語学習に対する意識に及ぼす影響を検証することであり、筆者らは、附属校の特長を活かし、質・量ともに異なる「外国語活動」「外国語科」を受けた附属小生と外部小生の比較検証を行った。その結果、「外国語活動」「外国語科」における児童の「思考・判断・表現」の育成をめざしたパフォーマンス課題の設定と評価の工夫は、附属小生と外部小生の中1の1学期段階の「思考・判断・表現」の育成をめざしたパフォーマンス課題成績における発話の流暢性に影響を及ぼすと推察される。また、質・量ともに異なる「外国語活動」「外国語科」を受けた生徒が混在していても、「思考・判断・表現」の育成をめざしたパフォーマンス課題の設定と評価の工夫は、附属小生と外部小生のパフォーマンス課題の成績の差を埋めることができ、両者の英語学習に対する意識の差はみられないと推察される結果となった。

キーワード：パフォーマンス課題、パフォーマンス評価、思考力・判断力・表現力、小中の学びの接続

I. 研究の背景と動機

文部科学省（2017a）により、2020年度から小学校「外国語活動」「外国語科」が全面実施となった。文部科学省（2017b）が「小学校の学びとの接続」を強調しているとおり、小学校「外国語活動」「外国語科」を受け、中学校でいかなる指導を行っていくかは重要課題である。高橋（2021、p. 28）は「小学校英語が教科化されたことにより、日本の学校英語教育は『小中高を通じてコミュニケーション能力を確実に養う』新時代を迎え、これからの中学校英語教育は、小と高を橋渡す『扇の要』の重要な役割を果たすことになる」と述べている。松浦（2021、p. 209）では、小学校6年生の後半から中学校1年（以下、中1）の前半を「のりしろ」と位置づけた指導が必要であり、中学校では小学校のゴールをしっかりと踏まえた指導が重要であるとしている。板垣・古家（2020、p. 81; p. 83）では、小・中において円滑な接続がうまく行われるかどうか、小・中双方の英語担当教師にとって大きな課題であり、小中連携については拙速に行うのではなく、数年の時間をかけて相互の関係性を築くことが重要であるとしている。文部科学省（2020）は「公立中学校における英語教育実施状況調査」において、9,340校中、小学校と英語教育に関する互いの取組・実践を情報交換する割合は73.8%であるが、小中連携したカリキュラムや学習到達目標などの設定を行う割合は17.7%に留まっていることを報告しており、小中間のシラバス上の連携も課題である。

文部科学省(2014)は「小学校における英語教育の抜本的拡充と中・高等学校における英語教育の高度化」を掲げ、「外国語教育強化地域拠点事業」(2014~2017年度)を実施した。本研究の参加者は、上記事業の研究指定を受けた京都教育大学附属桃山中学校(以下、附属中)2015年度入学生で、黒川が3年間指導を担当した生徒である。参加者には、研究指定を受けた同大学附属桃山小学校(以下、附属小)から入学し「外国語活動」「外国語科」の先駆けとなる指導を受けた生徒(以下、附属小生)と、外部の小学校(以下、外部小)から入学した生徒(以下、外部小生)が含まれる。本研究は、文部科学省(2017a; 2017b)の全面実施の先駆けとして、文部科学省(2014; 2015)及び文部科学省中央教育審議会(2016)を基に行われ、「英語教育の抜本的拡充及び高度化(文部科学省、2014)」と、「互いの考えや気持ちなどを外国語で伝え合う対話的な言語活動(文部科学省、2015)」の探究として、パフォーマンス課題とパフォーマンス評価の取組を報告するものである。

文部科学省(2017b)は「小学校の学びとの接続」を強調しており、筆者らは、「小中の学びの接続」とは、「小・中学校教員が互いの英語教育の内容を伝え合い、指導内容(題材や言語材料)・指導や評価の方法・教材や教具などを含め、互いの授業の中でそれらを活かすこと(黒川・山川、2019)」であると捉えている。文部科学省(2015)は、「中学では互いの考えや気持ちなどを外国語で伝え合う対話的な言語活動を重視した授業を行うことを基本とする」としている。文部科学省中央教育審議会(2016, p.198; p.201)では、「インタビュー(面接)、スピーチ、簡単な語句や文を書く等のパフォーマンス評価や活動の観察等、多様な評価方法から、その場面の児童の学習状況を的確に評価できる方法を選択して評価すること」の重要性を掲げている。また、中・高等学校において、説明・発表・討論等を通じて「思考力・判断力・表現力等(以下、思判表)」を育成するような言語活動の展開が十分に意識されていないことを指摘し、言語活動の改善・充実に資する、生徒が発信したいと思える題材を用いる視点を強調している。

文部科学省(2017a)では、育成すべき「思判表」は「外国語活動」では、「身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養うこと」、「外国語科」では、「身近で簡単な事柄について、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりするとともに、聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う基礎的な力を養うこと」が求められるとしている。文部科学省(2017b)では、「思判表」について、『英語を聞いたり読んだりして必要な情報や考えなどを捉えること』『英語を聞いたり読んだりして得られた情報や表現を、選択したり抽出したりするなどして活用し、話したり書いたりして事実や自分の考え、気持ちなどを表現すること』及び『伝える内容を整理し、英語で話したり書いたりして互いに事実や自分の考え、気持ちなどを伝え合うこと』の3点であるとしている。また、その育成のために、「外国語によるコミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、情報を捉え、それを整理したり吟味したりしながら思考を深めることで、自らの考えを形成したり深化させたり、さらに表現を選択したりして『論理的に表現』することを重視する」としている。パフォーマンス課題について、西岡・石井(2018, pp.14-16)は「様々な知識やスキルを統合して使いこなすことを求める複雑な課題である」とし、パフォーマンス評価とは思考する必然性のある場面(文脈)で生み出される子どもの振る舞いを作品(パフォーマンス)を手がかりに概念の意味理解や知識・技能の総合的な活用力を質的に評価する方法であると述べている。パフォーマンス評価については、西岡(2013)は「知識やスキルを使いこなす(活用する)ことを求めるような評価方法(問題や課題)」であるとしている。

本研究では、文部科学省が述べる「互いの考えや気持ちを伝え合う言語活動」及び、文部科学省中央教育審議会が強調する『「思判表」を育成するような言語活動』を、パフォーマンス課題を通して行うこととし、児童・生徒が既習の語彙・表現を用いて、自身の考えや気持ちを英語で伝えるためには、いかなるパフォーマンス課題の設定やその評価を行うべきであるかを探究する。文部科学省・国立教育政策研究所(2020a; 2020b)による学習評価に関わる指針が出されたのは、本研究の参加者が中学校での学びを終えた2年後であり、本研究では、文部科学省(2017a; 2017b)における「思判表」の考え方を基に、筆者らによるパフォーマンス課題の設定と評価の取組を分析し、どのような成果と課題が観察されたのかの報告を行う。本研究の参加者には、研究内容・参加方法・結果の公表などについて説明を行い、同意を得ている。

II. 先行研究

小中連携の在り方として、鴨川（2003）では、「児童・生徒の実態、教師の実態及びカリキュラム内容の情報共有の重要性」を挙げている。小中連携の取組としては、浦田・柏木・中田・井手（2014）では、「小中連携リンクユニット」を提案し、小6と中1でリンクする can の授業実践でリスニング調査を実施し、「動詞フレーズの音声と意味をつなぎ、語順への意識に影響があった」と報告している。小学校英語授業を受けての中学校英語教育の在り方として、加賀田（2003）は「小学校で培われたコミュニケーションに対する積極的な態度や初歩的な言語運用能力を一層伸ばす中学校での指導の在り方」を、犬塚（2007）では、小学校で体験してきた会話場面などの再提示、実際の英語使用場面に近い状況で自由度の高い会話の体験、及び心通い合うコミュニケーションの体験を挙げている。板垣・鈴木（2015）では、(1)「外国語活動」において音声中心の外国語を体験し、慣れ親しむことで得た暗示的な言語知識を、中学校外国語教育において伸ばすための手立てと工夫、(2)「外国語活動」と中学校外国語科における教材、指導方法、及び授業雰囲気などにおける系統性・継続性を十分に考慮することの必要性を強調している。黒川・山川・泉（2020）では、小学校「外国語科」授業が中学校入学時の聴解力に及ぼす影響について調べ、高学年から開始する「外国語科」授業は、その頻度が週1回よりも週2回であるほうが、入学時の生徒の聴解力に影響を及ぼすこと、「読む」「書く」ことの指導は6年生段階から開始するよりも、4年生段階から徐々に行うほうが、入学時の生徒の聴解力に影響を及ぼすことが推察されると報告している。また、5年生から週2回の「外国語科」授業を行う際、授業頻度に加え、ICT、Can-Do 指標、パフォーマンス課題の活用、「読む」「書く」ことの学びへの指導の工夫等の授業内容の質の向上が、入学時の生徒の聴解力に影響を及ぼす可能性があるとして報告している。

パフォーマンス課題に関わっては、横山・田中（2013）が中学校第1学年におけるパフォーマンス課題とルーブリックの取組や取組後の意識調査結果を紹介している。立松・池野・河野・河野・濱田（2017）では、各学年段階のパフォーマンス課題例、及び共同学習の要素を備えたパフォーマンス課題の取組を紹介し、第1学年における他者紹介実施後に、79名中71名（89.9%）が「パフォーマンス・テストが好きである」と回答したことを報告している。小中の学びの接続を意識したパフォーマンス課題の実践としては、喜多・林（2016）が、小中9年間で自律した英語学習者を育成するために行った小学校第5学年における「表現する力」を育成するためのパフォーマンス課題設定とその実践を紹介し、場面設定の工夫の重要性を強調している。横山他、立松他、喜多他は全て、国立大学附属校における研究であるが、小学校ないしは中学校における研究であり、研究開発校である附属小・附属中が取り組んだパフォーマンス課題と評価の実践例を報告する本研究には意義があると考えられる。

III. 本研究の概要

1. 研究目的と研究課題

本研究の目的は、『思判表』を育成する言語活動の探究として行ったパフォーマンス課題と評価の取組が、生徒のパフォーマンス課題の成績と英語学習に対する意識に及ぼす影響を検証することである。筆者らは研究開発校における「思判表」を高める研究の一環としてパフォーマンス課題と評価について取り組んだため、附属校の特長を活かし、質、量ともに異なる「外国語活動」「外国語科」を受けた附属小生と外部小生の比較検証を行うこととし、以下の研究課題を設定した。

研究課題1: 児童・生徒の「思判表」の育成をめざしたパフォーマンス課題の設定と評価の工夫は、各学年段階のパフォーマンス課題の成績において、附属小生と外部小生の間の差を埋めることができるか。

研究課題2: 児童・生徒の「思判表」の育成をめざしたパフォーマンス課題の設定と評価の工夫において、中学校卒業時の附属小生と外部小生の英語学習に対する意識に違いがみられるか。

2. 方法

(1) 参加者

本研究の参加者は研究指定第2年次の2015年度に附属中に入学した附属小生65名と外部小生53名の合計118名であり、帰国生は含めていない。

(2) 参加者が小学校で受けた指導

外部小生の出身小学校は多岐にわたり、一部低学年からの英語学習を行う地域からの入学生も含むが、大半は第5学年からの「外国語活動」を最低週1回は受けている。附属小生は低学年で2週間に1回、中・高学年で週1回、日本人英語専科、外国語指導助手（以下、ALT）、学級担任の3名によるほぼ all English の指導で学び、高学年での指導の特長は、(1) リスニング重視の指導、(2) デジタル教材を用いての十分なインプットにより音声と文字とを結び付けることを意図した指導、(3) 電子黒板を活用し音声を伴った絵カードやチャンツ・歌を用い五感を使い英語に慣れ親しむ指導、(4) 多様なパフォーマンス課題の設定と評価の取組、(5) 児童向け Can-Do 指標を用いた「振り返りシート」による自己評価の取組（長沼・幡井・森本・山川、2018）、(6) 全教室に電子黒板の配備と校内 LAN が整備された環境下で ICT を活用した多様な視聴覚教材の活用、である。タブレット PC に資料を蓄積し友だちとの情報交換をして作品作りを行い、発表を撮影し児童間で改善案を話し合った後、タブレット PC を用いてのパフォーマンス課題発表を行った。

(3) 附属小におけるパフォーマンス課題の設定と評価

表1に附属小におけるパフォーマンス評価を示す。

表1

附属小におけるパフォーマンス評価（泉・山川・黒川・津田、2018）

観点	評価項目	評価規準	A「十分満足できる」状況	B「おおむね満足できる」状況	C「努力を要する」状況
知識・技能	流暢に話す	音と音のつながりやイントネーションを意識しながら最後まで話すことができる。	音のつながりやイントネーションを意識し、文の流れを保って話すことができた。	つかえることもあるが、最後まで話すことができた。	途中で止まったりしてしまったりすることができなかった。
思考・判断・表現	文のまとまり	発表する事柄を整理し、適切に間を置くなど、叙述と考えの違いが分かるような発表ができる。	話の区切れごとに相手理解しているかを確認するような表現が加えられていた。	叙述と自分の考えとの違いが分かるように区切って発表できた。	話の区切れが分かる発表ではなかった。
主体的に学習に取り組む態度	発表の積極性	伝える相手の人数や状況に合わせて適切なジェスチャーや表情をすることができる。	伝える相手の人数や状況に応じて目線を振ったり、話題に合わせて表情やジェスチャーを取り入れた発表ができた。	相手に目線を振ったり、ジェスチャーを入れたりした発表ができた。	資料や下ばかりを向いたり相手に目線を合わせられなかった。

附属小生は、第5学年で「私の好きなもの・嫌いなもの発表」、「買い物スキット・ペア発表」、第6学年で「オーストラリアの小学校に向けての学校紹介ビデオ・メッセージ発表」、「英和・和英辞典を活用したアルファベット・クイズ作成・発表」、「My Weekend 発表」、「English Festival」での英語劇発表、「職業名を用いての My Dream 発表」等のパフォーマンス課題に取り組んだ。

(4) 参加者の中学入学時の状況

中学入学直後に入学時調査内の「英語の学習が好きですか」という質問への回答結果の検定を行った。附属小生と外部小生の間で、英語学習が好きだという意識に関して、どのような異なりがあるかを調べるために、両者の回答結果の検定を行った。データが正規分布しなかったため、検定法としては、記述統計量・マン・ホイットニーの U 検定を用い、効果量²計算を行った。

表2に附属小生と外部小生の回答の検定結果を示す。

表 2

入学時調査の「英語の学習が好きですか」という問いに対する回答の検定結果

群	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	平均ランク	順位和	<i>U</i>	<i>W</i>	<i>Z</i>	<i>p</i>	<i>r</i>
附	65	3.85	1.33	63.80	4147.00	1443.00	2874.00	-1.58	.120	-.15
外	53	3.49	1.31	54.23	2874.00					無

表 2 より、「英語の学習が好きですか」という問いへの回答において、附属小生と外部小生の間に「好き嫌いについて」の中央値に有意差はみられなかった ($U=1443$, $p=.120$)。つまり、低学年から英語指導を受け、第 6 学年では研究指定のもと、「外国語科」を受けた附属小生と、大半が高学年からの「外国語活動」を受けた外部小生の英語学習が好きであるかについての意識の差はなかったことがわかる。

(5) 参加者が中学校で取り組んだパフォーマンス課題とその評価

中 1 段階で取り組んだ主たるパフォーマンス課題は検定教科書本文内の対話を自分たちで場面設定・内容を考え、原稿作成なしで口頭練習後に発表する「アレンジ・スキット発表」である。「思判表」の観点は (1) どのような場面・状況を設定し、どのような内容にするか、(2) 既習の言語材料をどう用いて、ペアでどんな順番でやりとりを行うか、(3) スキット内容を聞く人が理解できるよう、いかに工夫して発表できるか、の 3 点である。中 2 段階の主なパフォーマンス課題は「学習した教科書題材に関わるトピックに関わる口頭発表課題」である。

NEW HORIZON English Course 3(2006)内の初見題材“Family Rules”を用いたパフォーマンス課題では、参加者は 1 時間の授業内で (1) リスニングとリーディングによる題材の内容理解、(2) 個人で「4 人の登場人物が各場面でどのような思いを抱き、自身なら、いかなる思いを持つか」を考える、(3) 4 人グループで互いの考えを交流し、キーワードを相談する、(4) キーワードをもとに即興で発話する、(5) 発表の分担や順番の相談と口頭練習、(6) クラス発表、という手順で行った。中 3 段階では「本文及び副教材内の登場人物の思いや考えに関わる個人発表」と「本文及び副教材の内容や様々なトピックに対する自身の考えを、他者との意見交換後に発表する個人発表に取り組み、(1) 伝えたい内容を考え、マインド・マッピング (以下、MM) を行う、(2) MM を参考にしての口頭練習、(3) ペア/グループ・ワークでの意見交換、(4) 他者の意見を聴いた上で、自身が伝えたい内容を再度考えての個人口頭練習、(5) 全体発表、という手順で「他者の思考を聴き、自身の思考を再構築すること」を意識して取り組んだ。

NEW CROWN ENGLISH SERIES 3 New Edition (2016) 内の“I Have a Dream”を用いたパフォーマンス課題 (以下、IHD 課題) では、参加者は (A) 白人席が満席となり「席を譲らないと通報する」とバスの運転手から言われたが譲らず逮捕されたパークスさん、(B) 通報したバス運転手、(C) 事件を知ったアフリカ系アメリカ人達、(D) 公民権運動に加わった白人達、のいずれかを選び、自身がその立場であれば、どのような思いを抱くかを考え、「自身の考えをどのような語彙・表現を用いて、いかなる順序で伝えれば自身の思考が聴く人に伝わるのかを考え工夫すること」に留意して発表を行った。附属小の「思判表」に対する評価規準の「発表する事柄の整理」「適切な間」「叙述と考えの違いが分かる発表」の発展として附属中では「言語材料・発表の構成・表現方法の工夫」が重視された。参加者は事前に評価項目が (1) **English** (学習した語彙・表現を正しく用いて正しい発音で伝えているか)、(2) **Content** (自分が考えた内容を、聴く人が理解できるように、順序立てて伝え、聴く人が理解できたか)、(3) **Delivery** (自分が伝えたい内容を、声の大きさ・声色等に工夫して、表現豊かに、わかりやすく伝えることができたか)、の 3 点であることを知らされ、それらに意識して発表を行い、発表後に自己評価シート内の 3 点に 5 段階評価を行い、感想を記述した。

表 3 に IHD 課題で用いた教師用評価を示す。

表3

IHD 課題評価表 (教員用)

観点	評価項目	評価規準	A「十分満足できる」状況	B「おおむね満足できる」状況	C「努力を要する」状況
思考・判断・表現	発表の内容と構成	自分が伝えたい内容を用いる言語材料・発表の構成・表現方法を工夫して適切に伝えることができる。	説得力ある発表となるよう、 <u>推測できる登場人物の思いと自身の思いの両方を</u> 考え、工夫して、わかりやすく伝えることができた。	わかりやすい発表となるよう、工夫して、 <u>自身が登場人物の場合、どんな思いであつたかを、伝えることが</u> できた。	自身が登場人物であった場合に <u>どんな思いであつたかを伝える</u> ことはまだ難しい。

3. 分析方法

(1) パフォーマンス課題成績

附属小におけるパフォーマンス課題の取組（以下、附属小の取組）が中学校入学後にいかなる影響を与えているかを検証するため、中1の1学期に行ったパフォーマンス課題の成績データを検証した。入学以降の英語授業の直接的な影響や学外での英語学習の影響が出ないように、検定教科書内の新出語彙、基本文型及び本文をそのまま用いた計15回分の小テストの合計点と入学時調査回答をもとに通塾状況や家庭学習量を考慮してマッチングを行い、小テスト合計点の偏差値55以上の上位層各22名、45以上55未満の中位層各10名、45未満の下位層各5名から成る、附属小生・外部小生各37名計74名を抽出した。この抽出生徒の中1の1学期、中2の2学期、中3の2学期に行った筆者1とALTとの複数で評価を行ったパフォーマンス課題における成績データを比較した。分析に用いた中1段階のパフォーマンス課題は、5月に行った30秒間でALTに既習の言語材料を用いた15個の質問を行う課題1、6月に行った既習の言語材料を用いて30秒以内で行う「他者紹介」課題2、7月実施のALTのDo you...? What's your favorite subject?等の質問に答え、疑問詞を用いてALTに質問し、やり取りする課題3、学年末に行った2枚の絵を1分間で口頭描写する課題4であり、全て即興のパフォーマンス課題である。評価項目は発話英文数、正確さ、相手意識の3点とし、録音・録画を行い、評価を行った。本研究では、『正確さ』とは誤りのない言語の理解・産出能力を指し、『流暢性』とは速いスピードでポーズやためらいなく言い換え等を用いて言語産出できる能力である」とするSkehan (1998, p.108)の規定を参考にした。「相手意識」は相手をどれくらい意識して伝えようとしているかをアイ・コンタクトやジェスチャーを含めて採点を行った。中2・中3の成績については中2の2学期及び中3の2学期に行ったパフォーマンス課題の合計点を用いた。

(2) 意識調査

本研究で行った意識調査は「3年2学期末英語学習意識調査」（以下、調査1）、卒業前に行った「3年間英語学習自己評価最終報告書（以下、調査2）」及び「3年間の英語学習を終える今」（以下、調査3）」の3種類で参加者全員の意識を検証するために全員の回答を対象とし4件法と記述式を用いた。本稿では英語学習への意欲関心とパフォーマンス課題に関わって報告する。

IV. 分析と考察

1. 分析1：研究課題1に関して

(1) 附属小生と外部小生の中1の1学期小テストの結果

先述した小テストの小問ごとの弁別力指数を算出し弁別力指数0.30未満の小問を除去した上で分析を行った。

合計 159 点満点である。抽出生徒の 1 学期中の小テストの合計点の記述統計量・マン・ホイットニーの U 検定結果・効果量の結果は $U=525$ 、 $p=.959$ 、 $r=-.010$ で、附属小生と外部小生の小テストの中央値に有意差はみられなかった。

(2) 中 1 段階におけるパフォーマンス課題の成績の分析と考察

中 1 の 1 学期に行ったパフォーマンス課題では、先述した課題 1 における発話英文数 (10 点満点) 及び「正確さ」と「相手意識」の小計 (15 点満点)、課題 2 の合計点 (15 点満点)、課題 3 での発話英文数 (15 点満点) 及び「正しさ」と「相手意識」の小計 (18 点満点) の合計点 (73 点満点) の各項目について、記述統計量・マン・ホイットニーの U 検定を行った。結果は附属小生と外部小生の合計点の中央値に有意差はみられなかった ($U=525$ 、 $p=.084$) が、課題 1 における 30 秒間で発話した発話文数、つまり発話の流暢性においては、附属小生が外部小生を $p=.034$ 、効果量小 ($r=-.25$) で上回る結果となった。

表 4 に附属小生と外部小生の課題 1 の成績の検定結果を示す。

表 4

中 1 の 1 学期パフォーマンス課題の成績 附属小生対外部小生 検定結果・効果量

項目	群	n	M	SD	平均ランク	順位和	U	W	Z	p	R
課題	附	37	7.43	1.54	42.68	1579	493	1196	-2.111	.034	-.250
1	外	37	6.70	1.76	32.32	1196					小

表 4 より、附属小の取組が発話の流暢性に影響を及ぼしたことが観察される。この要因として、附属中では附属小の取組で重視された「音と音のつながりやイントネーションを意識しながら最後まで話すこと」と「文の流れを保つこと」の 2 点を継続・活用・発展させ、「場面・状況がまとまりある内容になること」「ペアでどのような順番でどのようにやり取りを行い、最後まで話し続けるか」及び「聞く人が理解できる発表となる工夫を行うこと」の 3 点に留意した附属中でのパフォーマンス課題の取組 (以下、附属中の取組) の成果でもであると推察される。

学年末に実施した課題 4 の成績では、1 枚目の絵の描写における発話英文数 (10 点満点)、及び流暢性と正確さ (各 5 点満点) と 2 枚の絵の描写における発話英文数 (7 点満点) について、記述統計量・マンホイットニーの U 検定を行った結果、合計点 (27 点満点) では $U=589$ 、 $p=-1.035$ 、 $r=.304$ で両群の間に有意差はみられなかった。

(3) 中 2、中 3 段階におけるパフォーマンス課題の成績の分析と考察

中 2 の 3 学期及び中 3 の 2 学期に行ったパフォーマンス課題成績では、両時期の成績とも附属小生と外部小生の間に合計点 (74 点及び 60 点) の中央値に有意差はみられなかった ($U=485$ 、 $p=-.948$ 、及び $U=561$ 、 $p=-.410$)。これらの要因としてグループ内での意見交換という協働性が各個人の取組の助けとなり附属小の取組を継続・発展させる取組であったことが挙げられる。

2. 分析 2: 研究課題 2 に関して

(1) 英語授業と英語学習に対する意識調査結果と考察

調査 1 内の「英語学習に意欲・関心がある・どちらかと言えばある」と回答した割合は附属小生は 80 %、外部小生は 88.7 %、全体は 84.1 %であり、「英語の授業は楽しい・どちらかと言えば楽しい」と回答した割合は附属小生 80 %、外部小生 71.7 %、全体は 76.2 %であった。調査 3 で「英語という教科が好き・どちらかと言えば好き」と回答した割合が附属小生 75.4 %、外部小生 78.2 %、全体で 76.26 %であった。附属小生と外部小生の比較結果では、これら 3 つの項目のそれぞれの中央値に有意差はみられなかった。8 割を超える生徒が英語学習に意欲を持ち、約 8 割の生徒が「英語授業が楽しい」と感じている状況は「授業の中で自分が伝えたいことを

表現する場があること」が影響しているとも推察され、「自身が伝えたい内容を発表できる授業の中での自由度」が「授業が楽しい」と感じさせる要因の一つとして挙げられる。「英語という教科が好き・どちらかと言えば好き」の回答割合が76.2%であった結果は、文部科学省（2018）が中学3年生約6万人を対象に4件法で行った調査で54.6%であった結果と比較しても高く、全回答結果において附属小生と外部小生の間に有意差が検出されなかった結果は参加者が附属中の取組に慣れ親しんだ成果であると推察される。

(2) パフォーマンス課題に関する意識調査結果の分析と考察

調査3内の「各活動が楽しく力がついたか」という質問に対し、参加者がパフォーマンス課題のうち、「楽しく力がついた・どちらかと言えば楽しく力がついた」と回答した割合が高かった課題の1位は「個人プレゼンテーション」(98.9%)、2位が「登場人物の思いを考えたのミニドラマ発表」(93.4%)、3位が「オリジナル・スキット発表」と「場面設定がある自由会話活動」(89.7%)であった。参加者のほぼ全員が様々なタイトルで行った「個人プレゼンテーション」が「最も楽しく力がついた・どちらかと言えば楽しく力がついた」活動であると捉えたことが観察され、仲間との意見交流後、伝えたいことを自由に発表する取組が参加者に充足感を与えたと推察される。

(3) 調査2及び調査3におけるパフォーマンス課題に対する記述回答結果及び考察

参加者には「パフォーマンス課題」ではなく「プレゼンテーション」(以下、プレゼン)という語彙を用いられたため、回答記述にもプレゼンが用いられている。紙面の都合から記述の一部のみ示すが、附属小生の記述では、「プレゼンでは自分の伝えたいことを自分の言葉でしっかりと伝えることができるようになってよかったです。」「スピーキングやリーディングをたくさんやって、できることが増えていくのが嬉しいし言語によって人との関わりを持てるのが楽しい。」「プレゼンや面接が増え、話す力がつきました。そして、言いたいことを英語で話そうとする意欲がこの3年間で出てきました。」等がある。外部小生の記述には、「人前で英語で話すことに慣れ、何より即興で話せるようになったことが大きな成長だ。」「話せるようになったらすごく嬉しかった。」「自分が伝えたいことが英語にできるようになったのでとても成長を実感しています。」「プレゼンが英語の取組で一番良かったと思う。前に立って緊張する中、英語で自分が話したいことを伝えるというのが力を伸ばす良い経験だった。」等があり、附属小生、外部小生ともに、「自己の思いを伝えること」に喜びを感じスピーキング力の向上を実感していることが観察される。

V. 結論

1. 結果

本研究では、児童・生徒が既習の語彙・表現を用いて、自身の考えや気持ちを英語で伝えるためには、いかなるパフォーマンス課題の設定やその評価を行うべきであるかを探究した。そのために、研究開発定校で小中の学びの接続を意識し、児童・生徒の「思判表」の育成をめざして行ったパフォーマンス課題の設定と評価の工夫が、質、量ともに異なる「外国語活動」「外国語科」を受けた附属小生と外部小生のパフォーマンス課題成績と英語学習に対する意識にどのように影響するのかの検証を試みた。

先述の考察を基に次のことが言える。

- (1) 「外国語活動」「外国語科」における児童の「思判表」の育成をめざしたパフォーマンス課題の設定と評価の工夫は、附属小生と外部小生の中1の1学期段階の「思判表」の育成をめざしたパフォーマンス課題成績における発話の流暢性に影響を及ぼすと推察される。
- (2) 質、量ともに異なる「外国語活動」「外国語科」を受けた生徒が混在していても、「思判表」の育成をめざしたパフォーマンス課題の設定と評価の工夫は、附属小生と外部小生のパフォーマンス課題成績の差を埋めることができると推察される。
- (3) 質、量ともに異なる「外国語活動」「外国語科」を受けた生徒が混在していても、生徒の「思判表」の育成

をめざしたパフォーマンス課題の設定と評価の工夫において、附属小生と外部小生の英語学習に対する意識の差はみられないと推察される。

2. 課題とまとめ

本研究における今後の課題としては、次の4点が挙げられる。

- (1) 参加者のパフォーマンスの録音・録画記録の継続により、そのアウトプットの詳細な検証を続けていく必要がある。
- (2) 本研究の意識調査の質問に、複数の要素を含んだものがあつた。生徒の意識をより詳細に調べるために、意識調査の内容にも工夫を行う必要がある。
- (3) 本研究の意識調査の分析には、パフォーマンス成績検証での抽出生徒の比較ではなく、参加者全員を対象とした。今後、分析方法のさらなる検討も必要である。
- (4) いかなるパフォーマンス課題の設定及び評価方法が、児童・生徒の4技能5領域及び学習意識を高めるのかの探究も必要である。

本研究は、全面実施以降の児童・生徒の4技能5領域及び英語学習に対する意欲・関心を高めていくために、小・中学校教員が互いの授業実践を交流し合い、小中の学びの接続を意識した授業改善を継続し合うことの重要性を示唆していると考えられる。本研究が、パフォーマンス課題の設定・評価の取組及び小中の学びの接続の取組の一例として貢献できれば幸いである。

謝辞

本研究の主旨・実施・結果の公表等に同意し熱心に授業に取り組んでくれた児童・生徒たちと、研究指定にも取り組んでくださった先生方、ご助言・ご指導くださった先生方に厚く御礼申し上げます。

注

- 1 本論文の一部は第19回小学校英語教育学会（北海道科学大学）において発表した内容（黒川・山川、2019）を加筆修正したものである。
- 2 筆者らが関わる参考文献及び本研究における効果量計算には水本・竹内（2008）で紹介されているExcelによる効果量計算シートを用いた。

（追記）研究上の役割分担としては、附属小での研究の中心は山川拓が、附属中での研究の中心は黒川愛子が担い、両校の指導助言に泉恵美子が関わった。

引用文献

- 犬塚章夫（2007）。「小中連携の中での中学校の英語指導のあり方」松川禮子・大下邦幸（編著）『小学校英語と中学校英語を結ぶ—英語教育における小中連携』77-85. 高陵社書店.
- 板垣信哉・古家貴雄（2020）。「第12節 小中連携」小学校英語教育学会20周年記念誌編集委員会.『小学校英語教育ハンドブック—理論と実践—』78-83. 東京書籍.
- 板垣信哉・鈴木渉（2015）。「小学校外国語活動と中学校外国語教育の接続—言語知識と記憶理論の観点から—」『小学校英語教育学会誌』15, 68-82.
- 泉恵美子・山川拓・黒川愛子・津田優子（2018）。「思考力・表現力を育成するパフォーマンス課題と評価—小中の英語教育における取組—」『京都教育大学教育実践研究紀要』18, 213-222.
- 加賀田哲也（2003）。「第10章 中学校との連携について考える」樋口忠彦（編著）『児童が生き生きと動く英語活動の進め方』150-154. 教育出版.
- 鴨川純一郎（2003）。「第13章 中学校との連携—共有すべき情報の内容と進め方」金森強（編著）『小学校の英語教育指導者に求められる理論と実践』141-148. 教育出版.

- 笠島準一・浅野博・下村勇三郎・牧野勤・池田正雄 (2006). *NEW HORIZON English Course 3*. 東京書籍.
- 喜多千鶴・林裕子 (2016). 「表現する力を育てる小学校外国語活動の授業づくりー小学校第5学年における実践を通してー」『佐賀大学教育実践研究』34, 277-284.
- 黒川愛子・山川拓 (2019). 「スムーズな小中接続に向けてのパフォーマンス課題と評価の取組～『思考力・判断力・表現力』の育成のために～」第19回小学校英語教育学会発表資料.
- 黒川愛子・山川拓・泉恵美子 (2020). 「小学校における『外国語活動』・『外国語科』の授業が中学校入学時の聴解力に及ぼす影響」*Language Education & Technology*. 57. 99-124. 外国語メディア教育学会.
- 松浦伸和 (2021). 「第8章英語科の小・中・大の連携」卯城祐司・檜葉みつ子編著『中等英語科教育』208-209. 協同出版.
- 水本篤・竹内理 (2008). 「研究論文における効果量の報告のためにー基礎的概念と注意点ー」『英語研究』31, 57-66.
- 文部科学省(2014). 「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afiedfile/2014/01/31/1343704_01.pdf.
- 文部科学省(2015). 「外国語教育の根本的強化のイメージ」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/shingi_chukyo3/053/siryo/_icsFiles/afiedfile/2015/09/06/1360750_2-2.pdf.
- 文部科学省 (2017a). 『小学校学習指導要領 (平成29年告示)』.
- 文部科学省 (2017b). 『中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説外国語編』.
- 文部科学省 (2018). 「平成29年度英語力調査結果 (中学3年生) の概要」
https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afiedfile/2018/04/06/1403470_02_1.pdf.
- 文部科学省(2020). 「令和元年度公立中学校における英語教育実施状況調査」https://www.mext.go.jp/content/20200715-mxt_kyoiku01-000008761_5.pdf.
- 文部科学省中央教育審議会 (2016). 「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afiedfile/2017/01/10/1380902_0.pdf.
- 文部科学省・国立教育政策研究所 (2020a). 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 [小学校 外国語・外国語科]』.
- 文部科学省・国立教育政策研究所 (2020b). 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 [中学校 外国語科]』.
- 長沼君主・幡井理恵・森本敦子・山川拓 (2018). 「小学校でのパフォーマンス評価における Can-Do 評価の用い方に関する一考察」『日本児童英語教育学会研究紀要』37, 187-204.
- 根岸雅史ほか37名 (2016). *NEW CROWN ENGLISH SERIES 3*. 三省堂.
- 西岡加名恵 (2013). 「パフォーマンス評価を取り入れた『高大接続評価システム』の提案」文部科学省中央教育審議会高大接続特別部会資料.
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/giji/_icsFiles/afiedfile/2013/06/03/1335588_1.pdf.
- 西岡加名恵・石井英真 (2018). 『Q&A でよくわかる! 見方・考え方を育てるパフォーマンス評価』明治図書.
- Skehan, P. (1998). *A cognitive approach to language learning*. Oxford: Oxford University Press.
- 高橋一幸 (2021). 『改訂版 授業づくりと改善の視点 小と高をつなぐ新時代の中学校英語教育』教育出版.
- 立松大祐・池野修・河野圭美・河野操・濱田眞基子 (2017). 「論理的思考と表現力の育成を目指す英語授業の展開ーパフォーマンス課題の充実から考える授業改善ー」『愛媛大学教育学部紀要』64, 57-68.
- 浦田貴子・柏木賀津子・中田葉月・井手眞理 (2014). 「コミュニケーション能力の素地から基礎へと結ぶ小中連携リンクユニットの創造: 事例学習と基礎学習の繋がりを通して」『小学校英語教育学会誌』14, 244-259.
- 横山千春・田中彰一 (2013). 「パフォーマンス課題とルーブリックで発信力を問うー1年英語科 SP2 道案内『留学生に佐賀大学周辺マップを作って紹介しよう』を通してー」『佐賀大学教育実践研究』35, 147-162.